
今日から君も

やまゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日から君も

【Nコード】

N2508B

【作者名】

やまゆ

【あらすじ】

剣あり魔法ありラブあり笑いあり涙ありのスペースファンタジー

！！

第一夜 襲撃

ウルドレイクインダストリーが小さな星間貿易会社だったのを覚えていた人は、今となってはそう居無いだろう。

今や巨大銀河間軍需財閥と成長したウルドレイクインダストリーは、新兵器の開発を期に突如、次々と惑星を侵略し始めたのだ。

新兵器―無限のエネルギーかと思われる火力を有し、そして総てが謎に包まれている。

その巨大な力の前に多くの星はなすすべもなく征服され植民星となるか、誇りを捨てずに抵抗するも焼き払われ死の星となる道しかなかった。

しかしながら辛くもウルドレイクに拮抗しゆる力を持つ星もあった。

雷光星。

物語は雷光星の、軋むような星空の夜から始まる…

ブリッジにでんと置かれた、青い球体の巨大スクリーンが、せわしくなく銀河の天気を映し出す。

光点が画面の隅でシラシラと瞬いてはシュツと消えてゆくのを、彼・宗彰は、見るともなしに眺めていた。

はっと息を呑むほど美しい青年だ。

瞳の色は深海を思わせる濃いブルーで、白い着物をふわりと着流し、長く伸ばした黒髪をてっぺんで纏め、さらりと流している。

しかし、美しい容姿にそぐわぬ肉付きのよい体と、ぼんやりとしている様でどこか隙の無い姿勢が、彼が武術にも長けている事を物語っていた。

そう、彼はこの帝星の第1位皇位継承者。いわゆる王子様というやつだ。

その力ゆえ、そして実力ゆえ、彼は今、王都防衛の指揮を任されている。

ふと、ひとつの紅点が彼の目に止まった。

すぐにカタカタと慣れた手つきで手元のコンソールパネルを叩き始める。

「はいはい、ワロスワロス！！！！今日も宇宙は隕石びよりいッ！
ッ！」

…違うよ？

この美しい青年が言ったわけじゃないからね！

物憂げな雰囲気を見事にぶち破って、一人の男が足取り軽くブリッジに入ってきた。瞳は南国の海のブルー、髪はパサパサした茶色、どこか血統書付きのダックスフンドを思わせる、親しみやすそうな笑顔が売りの好青年だ。

そうそのまさか、彼は第2皇位継承者で宗彰とは従弟同士である。機械系統に異常に詳しく、情報処理の総指揮をとっている。

茶髪くんはフンフンとご機嫌にコンピュータの合間をぬって歩いてしたが、宗彰がブリッジに残っているのをみつけてキャツと顔を覆った。

「宗彰！！タコみたいにリーダーにへばりついてないで、ちょっとは息抜きしたらどうなのさっ！？」

茶髪くんは宗彰の手を止めようと、コンソールパネルにベダツと覆いかぶさった。

宗彰が顔をしかめる。

「皇樹……！！ソコちよつとどいてちょんまげ……。まだ少し気になる所があるんだ。」

宗彰が美しい眉をひそませて皇樹をひつpegがそうと肩を掴んで揺さぶる。

「うぐ、お馬鹿っ！ 僕ちやまの敷いた警戒壁システムは、カンブエキなの……！！宗彰こそ、僕の可愛いコンソロパネルちゃんにべたべた触んでくれるかなあ！きつたない指紋が付くからさあ……！！」
「何いってんだよ、ちょ、それチクビ変なボタン押してるから！ホラどかないと鼻にネギ突き刺して変なオブジェにするぞ！」

「うぐうう…」

皇樹もなかなかの抵抗力を発揮してパネルにへばりついていたが、宗彰が本気の目つきで懷からネギを取り出したのを見てしぶしぶ離れた。

「うつつ…、宗彰の馬鹿あ！！！！毎日毎日警戒警戒警戒…、ちよつとぐらい僕と遊ぼうよう！！！！リーダーなんかじゃなくて女の子にへばりつきに行こうよう！！！！ねえねえねえねえねえねえ！！！！ねえムーミンこつち向いてよう！！！！」

「いや、昨夜の襲撃があつたばかりだし、撃退したにせよまだまだ油断できない状況だ……あと私は人知れずへばりつきに行くから。恋愛秘密主義だから。」

「うわああああん、宗彰の馬鹿ウンコー……！！頭力チカチウンコー……！！！！宗彰なんか、宗彰なんか………大好きだああああ……！！！！！！！！」

皇樹は涙をだばだば流しながら、階段を3段飛ばしで下り、ベーツと舌を出すとフィツとスクリーンを見やった。彼のまわりに次々と宙に浮かぶウィンドウが開いてゆく。と、不機嫌な彼の顔がぱつとほころんだ。

「わあ、領域20000内敵機なあし！　やっぱり僕ちんの警戒プログラムは完璧だね！！！！」

ほっとした顔で宗彰を見やる。

「……うん……」

「どつたの？」

「……静かすぎないか？」

ここ連日の敵の猛攻。絶えずこの星付近の宇宙のどこかで激しい戦闘があつた。しかし今、敵は完全に息を潜めている。本来喜ぶべきのだが、さきほどからそのことに宗彰は妙な胸騒ぎを感じていた。

どがあああああああああああああん!!!!!!!!!!

「敵襲です！レベルAA……D区画に被弾、相当数の被害。敵、フ
エイズドアレイレーダーには反応ありません！解析苦中……アンノ
ンです……！！」宗彰様、指示を……宗彰様！？」

「キイヤアアアアごめんなさいごめんなさい許してええー!!!」

どがごおおおおおん!

ずがああああああああああああん!

次々と襲い来る爆撃にブリッジがビリビリと波打つ。爆発のたびに強い衝撃がブリッジを襲い、オペレータの可愛こちゃん達が悲鳴をあげてパネルに掴まる。ウィンドウに被害報告が殺到し、燃え盛る街が映し出される。

「ぜ、全員戦闘配備に着け!!! P-5Cを距離2000まで全機展開。宮殿方面へは殲撃11を展開!!! D区画は怪我人をシエルターへ、残ったものは消火にあたつて! ちょ、皇樹! 脱いでないで敵の位置をなんとか割りだせ!!!」 「了解。はあ、今夜も寝かせないつもりかいセニヨリー、情熱的だねえ・・・」

皇樹がはだけた着物を直しながらスクリーンへかじりつく。軽口を叩いているものの、その目は真剣な鋭さを帯びていた。

宗彰は、青い球体スクリーンの隅々まで目を凝らした。しかし、何処にも敵らしい光点はない。画面の上では、宇宙はいたって平和そのもの。そんな馬鹿な! 現に街は炎の海だ。敵の位置が分からなければ、追い払いようが無いじゃないか!!!

「... P-5C状況を展開中... 20パーセントが撃墜されました。あと6分で壊滅します。A、O、G区画火災発生、D、U... 反応がありません!!! きゃ... 動力機関被弾! 出力30%ダウン」

「な・・・」

今までの攻撃の比ではない！！！！まるで…これじゃまるで…鷹に挑む雀じゃないか！

「変異機関パワーダウン、防御壁表層80パーセント消失・・・！あと10分持ちません」

「しええええええええ！！！！僕の愛しい防御壁 『万防御ん号』まんぼうえんごう ちゃんがああああ！！！！あの夜君のすべてを見た真夏の僕の青春があああ・・・！！！！！！！！」

皇樹が悲劇そのものといった感じの悲鳴をあげて泣き崩れた。そういえば彼は去年の夏、防御壁のプログラムも担当していたのだ。

ドオン…ドオン…ドゴオオン

だんだんと、振動が激しくなる。

都に、街に、見たこともない稲妻が降り注ぐ。もうスクリーン越しではなく、窓の外にはつきりと、青白い閃光が。

「そつそそそそ、そうしょおっ！このままじゃ防御壁がぶっこわれて僕のガラスのハートが粉々にい！！！！ついでに王都も粉々にいい！！！！あああああ、青い稲妻が僕を責めるううう！！！！」

皇樹がなかば錯乱状態でシャウトしている。そりゃあ、あれだけDANGERのウィンドウとスクリーンに囲まれば、ゴキブリ風呂に突き落とされた時の次に絶叫だろう。

宗彰は半ば啞然と、ただ燃え盛る王都を眺めた。背筋に嫌な汗が吹き出し、こめかみに鈍い痛みが走る。

もう一度だけ、とレーダーを見る。反応無し。もういい、目を閉じ

る。

敵は…いったい何処に…？なぜ姿が見えない…？

……いや、これだけの威力、たとえ敵の姿が見えた所でさして結果はかわらないだろう。

燃え盛る都の光景が脳裏をよぎる。

また…また自分は何も出来ないのかな？

いや…

守りたい…

この胸に、まだまだまだ

守るべきものが映る限り。

「今は王都の防御を最優先せよ。残りの全動力を防御壁に回してくれ。足りない分は私が補おう……。」

深海を思わせる青の底、ゆっくりと開いたその瞳の奥に、漆黒の炎が燃えている。

「うーん…、あの稲妻は敵の母艦から相転移されたものじゃないかなあ？」

皇樹が、宗彰には呪文にしか見えない数字の羅列を見て呟いた。

あのなすすべもない大敗から一夜明け、あたりは今、つかの間の平穏と静寂が支配している。

「相転移…？」

予想外の言葉に宗彰は皇樹の座るデスクをみやった。

彼のデスクのには今、『万御ん号ちゃんのお墓』と書かれたアイスの棒が突きささっており、何故か大量の花束とじょがりこ、ヘプシコーラが供えられている。

「そう、つまり瞬間移動。昨日はどんなに探しても敵さんの反応が出なかっただろ？ 僕も敵さんが巧みにリーダーから身を隠してると思ったんだけどね、それじゃあ余りにも計算が合わないんだよ。母艦から発射した攻撃をここまでワープでぶつとばして、直接叩き込んできたんじゃないのかな？」

そう言くと皇樹はひよいと机に手をのばし、じょがりこを綺麗に一本一本整列させだした。真剣そのものである。彼なりに思うところがあるのだろう。

「瞬間移動…な、もしそれが本当なら、なんちゅう手間と金のかかる事を…」

「ブブブブブ——ッ！！はずれっ、全然ハ・ズ・レ！ セクハラ親父のチョイ悪テクぐらい的外れーっ！！逝ってよし！！」

強烈な雄たけびとともに、ブリッジに一人の女性が入ってきた。聡明そうな明るい藍の眼、きつと彼女は笑うと世界一美しいだろう。腰まで届く美しい髪なにやら激しく興奮しきりである。

「うげええ…、あ、姉上…」

「げ、百合霞さん…」

「うげええ、じゃない！！ せえっかくこのお美しく頭脳明晰なおねいさまがあ、宮殿から駆けつけてきたんだから！！ハイ、もつと歓迎する！！・・・あら気が利くじゃない！」

そういうなり彼女はじょがりこをむんずと掴むとバリバリと豪快にむさぼった。皇樹の顔が、ムンクの叫びと見分けがつかないほど引きつっていることには微塵も気づいていないようだ。

続いてヘプシコーラをブハアと飲み干す。

「チェリーな坊や達におねいさんが教えてあ・げ・る…。ひとおつ、エロのことばっかしか考えてないあんたらの考えが、当たるわけな

あい！！ふたあつ、お空に残った粒子からは時空相転移の痕跡は見つかりませんでしたわけですよ！！！！　みーつつ、私はポテトよりも今ケーキが食べたあい！！！！」

さあ、感謝しろとばかりに胸をはる彼女に、悪気のわの字でもあったならまだ怒れるのに……いやいや、ここは笑ってジョークにするのが大人のダンディズムだぞ、と宗彰は苦笑した。

「上等だコラ……今度はバケツ一杯のケーキを食わせてやるよ……下剤がたっぷりはいった……な。」

どうやら皇樹には、彼女の行為を笑って大人のジョークにするダンディズムはなかったらしい。きつとあと5秒

で、万防御ん号ちゃん墓のアイス棒を姉上の鼻に突っ込むだろう。「で、でも、じゃあ一体なぜ敵の姿が感知できないのでしょうか……？」慌てて宗彰が言葉を繋ぐ。

「ふふふ……それはね坊や……」

「それは………??？」

二人が身を乗り出す。

「女の子なのよ！！！！！！」

………は？

女の子？

ポコン…コン…

何も届かなくなつたその先も。

唇からポコ、と小さな泡が溢れた

ゆらゆら上っていくその粒を、長い睫の隙間からボウツと見上げる。

ああ……温かい……春みたいだ……ああ……なんだか……とても……眠た

い
ん

う

[illegible]

第二夜 笑顔に気をつける（前書き）

百合香の提案した起死回生の奇策とは……？

第二夜 笑顔に気をつける

。

。

。。
。。
。。

.....「コッ」.....

。

。。
。。
。。

すべてはどこまでも、青く、遠く、果てなくぼやけた夢の夢の夢
のまた夢……。

果てなき蒼原……

深き湖底の青……

凍てついた焰……

夢……すべて夢……、揺り籠のように、ぬるく私を包む檻。

.....

.....ココン.....

。

○
。
○
。

.....だれかがよんでいる.....

四面ガラス張りの展望テラスに広がる漆黒の闇に、輝く砂塵をばら撒いたような星だけが光を放って居る。

天も地も無く、重力制御装置によって決められただけの“床”を、その男は憎むかのように踏みしめる。

小さな星達の輝きなどがき消して、すべてを闇へと吸い込んでしまいそうな灰の瞳。 まだ若く端正なはずの顔は狂気によって歪められ、逆に醜い表情だけが際立っていた。

ウトガルド、

それがその男の名前——。

「アレの様子は順調か」

ぼつり、と男が低く呟く。

「ええ、多少の“揺らぎ”のあとは静かなものですね。」

漆黒の闇から、艶のある声が返ってくる。すらりと白衣を纏いつた美女が闇をすべるようにすつ、と現れると男の脇へ控える。挑発的な瞳が闇の中で一瞬、きらきらと光ったような気がした。

「昨日の予想を遥かに上回った効果、見事だな。……しかし、何故最後の最後で実験を中止した？」

「稼動可能時間域を超えておりましたわ、あれ以上の使用は少々危険でしたもの……」

「ふん、その少々の危険を貴様が恐れさえしなければ、あの不落の皇星を落せたのだ。」

「あら……申し訳ありません社長。でも……」

「黙れ。女狐の言い訳など耳障りだ。」

男は女を音もなく抱きよせると、乾いた唇を女の真つ赤な唇に押し当てる。

男に抱かれ落ちていくのを感じながら、女の口元が薄く笑った。

「謎の鍵を握るのは……女の子なのよっ……っ！！！！」

……よっよっよっよっよっ……（エコー）

百合香のVサインが、ずばっしゅと二人の美青年の前に完璧な軌道を描いて超ナイスに決まった。……完璧。美青年達が陸に上がったエチゼンクラゲ見る様な目で百合香を見ている点を除けば、完璧に決まっていた。

女の子？

………は？

一瞬の沈黙がブリッジを支配する。

最初に沈黙を破ったのは皇樹だった。

「え~~~~っ」と宗彰、姉さまはどうもじょがりこの食べすぎで脳みそがポリクロトルエン仔牛脳化したに違いないよ！　いつもいつもちんちくりんな頭脳レベルのくせ僕の仕事の邪魔はするしお菓子は食べるしお気に入りのお口本は勝手にヤギに食べさせるし、ほんと基地外もいいとこだよねー。ていうか、死ねば良うぎゃああああああああ！！！！！！！！！！」

「せっかく美と知性の化身のような私がすんばらしい情報を待ってきてあげたのに可愛くない弟だことー！」

百合香さんと皇樹、このこうみえても仲は良いのだ。ただ……ちょ
おおっとお互い感情表現が不器用で、あとちょおおとおおっと
タイミングが悪いんじゃないかな、と宗彰は思っている。

でもだからって垂直落下式ブレーンバスターはちよつと過激すぎる
よ百合香さん、とも宗彰は思わないこともなかったのだが、そこは
何か兄妹間の抗いがたい力関係が働いたような気がしたのであえて
スルーした。

「ゆ、百合香さん、すんびやらい情報って……？」

「うふん。よくぞ聞いてくれたな宗彰くん！」

百合香はにまつと目を細めて笑うと……因みにその笑顔はとおつて
も美しかった……無意味にくるんと一回転してポーズを決める。

「そう、すんびやらい情報！！ ていうのはね！！ ウトガルド
に情報提供者が居たのよ！！ それもすんぐおい美人さんな女の子
でさあ！！ いやー、助かった助かったあ！ なにせこのままじゃ
明日にも王都壊滅って感じじゃない？ これもひとえに私の人徳って
やつよねえー？」

百合香が立て板に水のようにまくしたてながら、白魚のような指で
虚空をさつと撫でる。空中にカラフルなウインドウが次々に花開い
ていく。そのうち一つのパネルが灰色の文字を浮き彫りにして静止
する。ーウトガルドー よく見るとその文字は小さな蛇が身をくね
らせた集合体で構成されたデザインで、大変気持ちが悪い。

「ウトガルド……私がうら若き女学生の頃はただの貿易会社だ
ったのにねえ……はあ、そのころは私もお肌ピチピチで……。」

ウトガルド重工——……。

——星間貿易会社としてひっそりと立ち上げられ、いつの間にやら主産業を兵器開発に腰を落着け、いまや歯磨き粉から核融合炉まで何でもござれの多岐にわたる超巨大企業に成長したが、百年ほど前のある朝、突然決意したかのように他の星間国家へと侵略攻撃を始めた何考えてんだかよくわからないクソツタレ会社である。

「意外と社長が女に振られてヤケクソになったのかもね？」

もちろん違う。侵略した星を殖民星として支配し、自社の製品の独占販売を目的としている、というのが宗彰の、もとい一般常識的な解釈である。

しかし、ウトガルドの挙動には謎が多い……。

さすが元が軍需会社だけあって巨大な軍事力で進攻したウトガルドはあつという間に六百近い星間国家を支配下におさめ、そして抵抗を見せた千二百の星を焼き払った。いまや銀河の文明国家のほとんどはウトガルドの勢力下にあり、そのに唯一対抗し、辛くも一度その侵略を撃退した国家が、宗彰達の雷樹星である。

「えーと、何から話そうかしら……順を追って、順を追ってよね……。まず、さっき昨夜の謎の攻撃の詳しい解析と索敵記録結果分析データがデーターのね。……さぶ。これによるとやっぱりレーダーは故障していたわけではないっぽいわ。つまり敵影なしってことよ。でもそれじゃおかしいわよねー。敵さんが居ないのに爆撃の嵐なんですもの。それで、ここー！　ここ見てここー！　！」

百合香が示したウィンドウがヒュオツと大きくなる。それは、どうやら昨夜の攻撃の気圏内での様子をとらえた映像のようである。しかし、ウィンドウを覗き込むなり宗彰はあつと息を呑んだ。……ありえない。

何も無い大気中から突如として大量の光の粒子が現れ収束すると、地上めがけて爆発的な勢いで発射される。鮮烈なヴィジョンが、宗彰の目に焼きつく。

「にや、にやにやにや何で何にも無いところからいきなりあんな光エネルギー爆発がつ！？ やっぱりビームを相転移で叩き込んで来たと考えるしかないんじゃない？」

皇樹が驚愕の声を発する。

「馬鹿ねえ。あれだけの高エネルギーをゲート無しに、しかも無人で転送するなんて無理よ……でも惜しいチャ惜しいわね皇樹。アンタが言ってるのは時空の相転移。でもこれは真空のエネルギー相転移なんですって。名前は似ていても全く違うものよ。」

「真空の相転移？」

「そう。内部情報提供者さんによると、敵さんは大気圏域で局所的にエネルギーの高次真空から低次真空への相転移を引き起こす出力装置を開発したわけ。それによって莫大なエネルギーの膨張が起こつてええ………ドカアアー………！」

「まじでか……！ でもまさかウトガルドがインフレーション理論をここまで突き進めて研究していたなんて……！ うおううおうやバイバイ重くやバイ……！！！」

皇樹が興奮して飲んでいた火星ソーダジュースの缶をブンブン振っている。しかし宗彰には二人が何を言っているのかさっぱりぼんだった。こう見えても皇樹と百合香はこの星の一、二を争う頭腦の持ち主なのだ。会話についていけない。むなしくただ降り注ぐジュース滴を避けるのみ。

「ああ宗ちゃん、つまりもおのすごく簡単に言うところ、ポップコーンが弾けるみたいに真空の粒がばーんって爆発してるのよ。ばーんばーん。それにしてもねえ、あれほどの真空の相転移を連続して引き起こすほどの出力なんて、一体どうやってやりくりしてるのかしらねえー。」

「はあ……………しかしそんな攻撃一体どうやって防げばいいんでしょうか…………？」

百合香の説明は良くわからなかったが、昨夜の凄まじい攻撃がウインドウが示すとおり何も無いところから突如として現れるものならば、そしてそれが八百もの防衛障壁を破壊する威力を持ち合わせているならば、防ぐ手立ては無いように思えた。このままではこの星は明日にも壊滅するだろう。胃に鉛を流し込まれた様な重く暗い気分が宗彰にのしかかる。

「あら大丈夫よ。」

百合香は事も無げに言い放った。

「その真空の相転移の制御装置をあんたたちが直接ヴッ壊しちゃえばいいのよおー！」

「いえええええ！？ …… まあ確かにソレしか方法は無さそうだけれどもさあ、姉上それは…… ちょっと……。」

無茶つてもんだらう。

それほどのエネルギーを制御する装置ならばおそらくウトガルド本社コロニー最奥にて開発されているだろう。いわば敵の本陣だ。ウトガルド社領内宇宙域に、うっかり片足突っ込んだだけでも百のリーダーで真っ黒焦げなのに、ましてや本社のあるコロニーに侵入するなど、修学旅行で女子露天風呂に僕は死にましえ〜んと叫びながら突撃するくらいの勇気ある自殺行為である。

「だいたいウトガルドへ行こうにもルートが…… 敵領内へのゲートは封鎖されてますし、通常次元宇宙間航行で億が一生きてたどり着けたとしても移動だけで一ヶ月もかかっちゃいます。その頃には帰るお家が傷だらけのローラに。」

「ちつつち、宗ちゃん、人の話は最後まで聞かなきゃだめよお。ウトガルドに内通者さんが居るって言ったでしょ？」

百合香がさらりと白い指で長い髪を梳って左右に振る。可憐なウィンク付き。

「その人が教えてくれたんだけど、I・N・Tネットワークは閉鎖されていないの。ウトガルドの人だって最新のアーティストの新曲をチェックしたりしたこんブログを見たり12ちゃんねるで毒を吐いたりしたいものね！ つまりそこから侵入できるわ！！」

「まって、姉上、今なんか凄いこと言ったよね…… I・N・Tネットワークってあの……？ もう一度聞くよ、侵入するってどこから……どこから入るって！？」

「ここからよ？」

百合香はにつこり笑いかけて、ウィンドウを事も無げに指差す。（これはまったくの余談だが、その笑顔は北極熊を一瞬で氷漬けに出来そうなほど美しかった）

「ご存知のとおりI・N・Tネットワークはまたの名を超越的上位構造体ネットワークと言って、私たちが高速宇宙航行の時に使用する“ゲート”とはまた違った異次元亜空間を通じて膨大な光情報網を処理しているのよ。物凄く頑張ってる人が入るうと思えばそこから入れないことも無い……………はず！！ 現に大昔、貞子さんって女の人がテレビから這いずり出てきて大騒ぎに。」

「違うう！！ 百合香さんそれお化け！！ それお化けですから！！」

なんて事を言い出すんだこの人は。まったく、非凡な頭脳を持つ人は時としてとんでもない発想を押し付けてくるものだ。現に普段何気なく使っているI・N・Tネットワークが実は異次元亜空間だなんて、宗彰はまったくご存じなかった。大体、いくら物凄く頑張ってたって人間がコンピューターの中に入るなんてこと、出来るわけがない。いくら百合香さんが天才策略家でも……。

「さうて、ここにひとつのプログラムソフトがありまっす。え…………… “モモたんが画面から出てくる” これは以前皇樹がゲームの美少女と何とかして口ではいえない様な事がしたいとその天才的なオタ頭脳を駆使して密かに開発していたもので」

「きゃああああ！！！！ 姉上ストップ！！ ストッ……………」

皇樹の悲壮な絶叫が木霊するが、百合香にはクラシック音楽を聴いているようにおもえるらしい。

「まあこれを基礎プログラムとして私の超次元的天才頭脳でちよいちよいといじくると……あら不思議！ 人間が電腦の世界の住人に！」

ギューイイイイイイイイン

不吉な音を響かせて、につこりと微笑む百合香の後ろ一面のウインドウが、次々と“起動”の文字に染まっていく。その“起動”ウインドウの倍ほどの“DANGER”の虎さんマークがぐるりと宗彰を取り巻いているのなんて、全く気付いてないんじゃないかと思うほど爽快なにつこり具合だ。

「ちょ、ちょちょ姉上ちょ、つとまつ、て——！！！！ なにものこれ行くの僕らじゃなくても！！！！ ほら急だしめちゃ危険だしもつと熟練の兵士でも」

「I・N・Tネットワークでの存在確率を高めるためには正当なる王家の血を受けた“オーバーツ”であるあなたたちが適役なのよ。それに宗ちゃんより強い力を持つ戦士なんてこの銀河にそう居ないわ。」

「じゃあせめて僕のかわりに姉上が」

「こんなか弱くて清楚可憐な乙女にそんな危険なことを強要するっていうの！！！！？？？」

少なくとも鬼の形相で皇樹の首を締め上げる百合香はか弱くて清楚可憐な乙女から二万光年ほどかけ離れているように思えた。

二人の押し問答の間にも、次々に鮮やかなウィンドウが花開いていく。

ふとそう宗彰は思う。これでも百合香さんは、その美貌とあいまって“英知の碧玉”なんて謳われる策略家である。その百合香さんが言うからには、おそらくはこれがこの星の生き残る最後の苦肉の策なのだろう……。

『プログラム起動完了。これより、指定座標X' 1 8 7 6 Y' 1 8 7 6 A' 9 8 7 U' 8 7 6 X' 0 . 6 7 5 8 4 Y' 0 . 8 7 7 6 6 A' 7 6 0 9 U' 0 . 0 0 0 0 0 0 0 0 6 9 への次元転移に移行します。移行成功確立2 8 . 8 4 6 7 %……』

「バックサポートは私に任せてねっ！　だいじょうびだいじょうび、いい旅夢気分よぉー！！」

宗彰は見てしまった、煙を吹いたコンピュータを百合香が蹴っ飛ばして黙らせるのを……。

「やな旅地獄気分ですー！！」

ギューウウウウウウウウウ……

宗彰の身体が幾重もの光の輪に包まれていく。

「うわーっ！！　　うわうわうわうわうわっ！！　　わうわうわう！！」

皇樹が半泣きで光の輪からの脱出を試みると走り回るが、輪はぴたり皇樹の動きについてくる。まるで首輪をはずそうともがく犬のようで情けない。

「あつ、姉上え！！　宗彰と僕はこれでも王位継承第一位二位なんだよっ！？　僕らにもしもの事があつたらこの星は……！！」

「そうねえ。」

百合香は艶やかな髪をクルクルと人差し指でいたずらにもてあそぶ。

「あんたと宗ちゃんが死んだら……次期王位継承者は……私。ね？」

光の輪越しに、にっこりと百合香が笑っている。地平線を駆け抜けて朝日を拝めそうなほどのにっこりだった。

……百合香さんはその美貌とあいまってこの星の英知の碧玉と謳われる策略家で……ふと、先ほどの思考が宗彰の脳裏をよぎる。

「うっ、この……っ、人ごろしいいいいいいいいいいい
 いいいい~~~~~……………！！！！！」

シュパアアアア……ン!!!!

断末魔の恨み節を木霊させて、二人の影は渦巻く空間へと消えていった。

満面の笑みの百合香を残して。

第三夜 I・N・Tネットワーク（前書き）

2人はウトガルドの本社コロニー潜入を目指すが…

第三夜 I・N・Tネットワーク

あとにはブリッジにただ一人、満面の笑みでバイバイと手を振る百合香が残るのみ。

やがて、その手も動きを止める。降ろそうとしてふと、百合香は胸元のネックレスへと手をやった。凍てつくように透き通った水晶の中に、小さな青い炎が煌々と燃える美しい宝玉。その宝玉をそっと指で包み込むと、緩んだ口元がきゅっと引きつり、その美しい顔がくしゃっと苦悶と不安に歪む。

「許してね……………こんな……………こんなすべにしか思いつかない愚かな私を……………どうか……………どうか無事に生きて帰ってきてね……………」

百合香の、普段からは想像もつかぬ弱々しいその祈りを、凍てつく星々の闇だけが聞いていた。

頭から氷水に浸かったような、凍りつく軋みに全身が悲鳴をあげた後、ゆっくりと体温が戻ってくる。

無事にI・N・Tネットワークへと入れたらしい。

「チックシヨウあのアマ、ぜうえつつあい生きて帰ってきてやる……
……それでもってあの女に体中の毛穴と言う毛穴がニキビになる
呪いをだな……！！」

どうやら皇樹も無事なようだ。

宗彰は、深く息を吸い込んで呼吸できることを確かめ、あたりの様子を伺う。これが、普段眺めているウインドウの中の世界……？

彼の体は淡い光が流れる宙域高空を漂っている。その遥か下方には虹彩の濁流が連綿と続き、細く幾重にも枝分かれしてゆく。さながら光情報の溪谷だ。

「ひゅー、あれがこのI・N・Tネットワークに溢れかえっている光情報の流れってわけか……うへえ、あっちなんかの淹みたいだぜ……
……宗彰気をつけ、あの光の波に触れたが最後一瞬にしてジユッ！
だぞ。ただでさえ僕たちはこの次元の異端者。物理的存在確立を制約されるんだから……。」

「それは……スリリングだなあ……。」

谷底の激流を見下ろし、宗彰はクラリとめまいを覚える。やや絶景すぎる見晴らしである。肝心なことに気がついて宗彰は不安になった。

「ウトガルドへ行こうにも、どっちへ行ったらいいんだろう？」

「ぐふっふっふっ、君の相棒様のこの頭脳をお忘れかね？？電腦と名の付くものにつけちゃあこの皇樹様にお任せあれよ！！　まずは現在地だな……アドレスNo. 00879 - 4637289 - 70342496609へアクセスルート表示。」

とんでもなく長い番号をスラスラと暗唱する皇樹に宗彰はちよつと驚いた。

言い終えた皇樹の周りに色鮮やかな光のキーボードが次々と現れ、得体の知れない文字系列が高速で画面に流れていく。

「うーん、どうやら姉上がウトガルド情報領の国境線スレスレまで運んでくれたみたいだな……ルート検索実行。目的地、ウトガルド本社コロニー……おお8Hit！　危険度Sか……危険、DS……さぶ。……最安全ルート絞込んでナビシステムへ記入。」

皇樹は、目で追えないほど目まぐるしく変わるウィンドウ相手にぶつぶつと呟くと、ハイスピードでキーを叩き込んでいく。

「ようし！　ナビシステムが勝手に目的地へ周辺空間を方向転換してくれるようにしたから、僕はただ真っ直ぐ前へ進むだけでいいぞ……な、なんだ宗彰その目は」

「………な、なんだかカッチョイイぞ皇樹………」

「なっ………！？　バツ！！　ななななんだよ急に………！！！！！」

賛辞の言葉をかけたのに、皇樹は何故か怒ったように朱に頬を染めると、そのまま逃げるようにふよふよ先に進んでいってしまう。不

可解に思いながらも宗彰も置いてかれまいと後に続く。

「い、いいか、ここから先はウトガルドの情報領域だ！ なにか起こるかわからないから覚悟しとけよっ！ ……ほゝら、言った先からもうおいでなすった。」

光の射す前方遙か彼方から、白い楕円球状の小型機動端末が三機、こちらにむかつて飛んでくる。

「な、なんだあれ？」

「決まってるだろ、敵さんのウイルスバスターがこの世界で具現化されたものさ！早速俺たちをかぎつけてやってきたな。」

『ソコノ、ニ、ジョウホウタイ、テイシシテクダサイ、アナタたちノミモトヲカクニンシマス』

ウイルスバスターが合成音声を発する。

「突っ切るぞ！！」

皇樹が障壁ウィンドウを纏って加速する。と同時に宗彰の周りにも障壁が展開される。宗彰も足がかりに固定ウィンドウを蹴って一気に加速し、一瞬のうちにすれ違ふとあっという間に距離を離す。

ぎゃんっ！！！！

とり残された三基が互いに顔を見合わせる。

『うつるすトニンシキ。セントウもーどおん、テキ、シヨウキヨシマス、シヨウキヨシマス』

ちゅいーん!!

ががががが

ビービー

ウイルスバスター達のスピードが一気に増し、てんではばらにビームを放ちながら宗彰たちを追う。

「うあつ、ま、まずいぞ皇樹!!」

「しつこいなあ……よし、皇樹様特製トロイの木馬お徳用パック発動!!」

皇樹が叫ぶと子供のおもちやのような木馬がぽんぽんと現れ、ウイルスバスターに接触するやいなや爆発する。当に瞬殺。

「うおおー凄いぞ皇樹!!! 普段のへちよっぷりからまるで別人みたいだ!!!」

「はっはっはー、蒼天の狼と呼んでくれ。」

宗彰が喜んだのもつかの間で、すぐさま後方の空間が揺らぎ新たに敵影が現れる。それも今度は大量に。

「……!! また来たっ!!」

「ぬはははは、まっかせなさい！！ 何基こようと同じこと。この千の殺し技をもつハンター皇樹様が殲滅してやる……………う！？」

不敵な笑みを浮かべていた皇樹が凍りついた。

どうやら今度は先ほどの哨戒用の端末ではなく本格的に武装特化されたウイルスバスターらしい。…………が、気になるのはその容姿である…………星型の杖を持ち、桃色の髪の魔法少女チックな少女達…………電腦世界のウイルスバスターというには似つかわしくない非常に可愛らしい姿である。

『アナタ方が不正あくせすぶろぐらむデスネ？ 悪い奴はモモがやつつけちやいマス！！！！』

少女の一人が可憐な声を発した。

「そ…そんな…モ…………、モモたん…………っ！！！！」

皇樹が震えた声でうめいた。さっきまでの威勢はどこへやら。

…は？

モモたん…？

なんだか、もの凄く、嫌な予感がした…………。

第三夜 I・N・Tネットワーク（後書き）

モモの元ネタ気付いた方…すみません。やっちゃいました。

第四夜 I・N・T 攻防（前書き）

皇樹の悲しいくらいにどうでもいい秘密発覚。

第四夜 I・N・T 攻防

「モモたん……？」

なんだかその響きにはなんとな〜く聞き覚えがあった。なんだろう……確か……

“モモたんが画面からでてくる”

そつだ、皇樹が実体化しようと目論んだゲームのキャラクターだ！
『モモいきマス！！メテオアタック！！！！えいつ！！！！』

ギャギャギャギャギャギャガ！！！！

少女達が華麗に舞うと一斉に光線が雨あられと降り注ぐ。大変メルヘンチックな光景だが、攻撃の渦中にある二人はたまったもんじゃない。

「な、なにボーっとしてる蒼天の狼！！早く千の殺し技とやらでなんとかしてくれーっ！！」

辛くも障壁によって攻撃を防ぎながらも、宗彰は慌てて皇樹を小突く。

「……で、出来ない！！」

「へ？」

「モモたんを傷つけるなんて僕には出来ないっ！！」

「ちよっ、そんなこと言っでないで撃破しないとこっちが傷だらけのローラに！！」

「黙れクソ虫！！モモたんは……っ、モモたんは僕の初恋の人なんだあ~~~~~っ！！！！」

うわあ……………。

知りたくもない皇樹の秘密を知ってしまった……。初恋がよりにもよってゲームのキャラクターとはもう悲惨すぎて形容のしようがないな……。思わず不覚にも涙がこぼれそうになる。

いやいやいや、今はあきれている場合ではない。生命の危機に瀕しているのだ。宗彰は腰の青刀を抜き切っ先を額にあてがうと神経を集中する。

「……………破っ！！！」

紫電一閃、鋭い剣尖が一度に三体をなぎ払う。モモたん……………もといウイルスバスターはほとばしる光塊へと化して消し飛ぶ。すばやく剣先を切り返し脇に飛び込んできた一体を真つ二つに斬りおろすと、間髪いれずに背後に襲い掛かる二体に衝撃を叩き込んで吹っ飛ばす。

「うわあああゝっ！！宗彰が幼女を斬った！！幼女を！！！」

「うつ……………落ち着け……………、あの姿はまやかした。無事に帰れたら本物のモモたんがまたモニター越しに笑いかけてくれるって……………」
宗彰は力無く弁解する。プログラムだとわかつているものの、なんだか猟奇殺人者のようでいただけない気分である。それにしても何ゆえウトガルドのウイルスバスターがゲームのキャラの姿を……………？
ウトガルドのプログラマーに熱烈なゲーマーでも居たのだろうか……………。なんにせよ最悪のチョイスである。

「やってくれまシタネ……………？」

たった数秒のうちに仲間の半数を失った少女達が、躊躇するように二、三步後ずさるとキツと眉を吊り上げる。

「皇樹、戦うのが嫌なら今のうちにさっさと逃げるぞー！！」

宗彰は皇樹の首根っこをひっ掴むと空を蹴って跳躍すると一気に距離をあけ突き進む。少女達の姿がみるみる豆粒大に遠のいて行く。

『逃しませんよー！！モモ、頑張っちゃいますよー？抹殺モードヘシフト。擬態解除シマス……………。』

遙か彼方となった標的を睨みすえ、少女達の身体が赤い光に包まれる。と、少女達の姿がみるみるうちに変身する。真っ赤に燃えるようなオーラを纏い、爪は鋭く伸び、口は耳元まで裂け、全身の筋肉が隆起し先ほどの可憐な姿は跡形もない真紅のグリフォンへと変貌を遂げていく。

「うっぎああああモモたああああん!!!!!!!!!!」

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!!!!!』

悲惨としかいいようのない皇樹の悲鳴と、グリフォンの咆哮が共鳴する。本性をあらわにしたウィルスバスターが天を引き裂くような咆哮を轟かせ、先ほどとは段違いのスピードで追いかけてくる。みるみるうちに二人との距離が縮まっていく。

「ぎゃああああ三倍速い!!!! 赤い!! なんか三倍速い!!!!」
「くっ!!」

宗彰は追いついてきた一体の額めがけて力いっぱい剣を振り下ろす。カキン!!

予想外の鈍い反動と硬い手ごたえに逆に腕がしびれ、無傷の化け物がニヤリと笑う。……しまった、障壁!!!!

『ガアッ!!!!!!』

「ぐはっ!!」

化け物の一撃が宗彰の腹にヒットする。障壁により致命ダメージは吸収されたものの激しい衝撃に一瞬意識が飛び、グラリとバランスが崩れ谷底へと真つ逆さまに落ちていく。落下先には光の渦巻く激流がまちかまえ……。

「宗彰おっ!!!!!!!!!!」

危機一髪で皇樹の展開した六角障壁ウィンドウが手荒く彼を受け止めなんとか身を立て直す。油断した……。剣を障壁に突き立てて頼りない足場を固定すると、気合を入れなおす。

『死ネ!!!!』

膝をつく宗彰にグリフォンが一気に襲い掛かるが、今度はすんでのところでうまく力を脇にそらすと腕を掴み合気道の要領で投げ飛ば

す。もちろんボディに追加効果即死の一撃を打ち込むのを忘れない。

「はあっ、はあっ……………はあ……………焦った……………」

「くそ………よくもいたいけな僕のハートをと宗彰を傷つけてくれたな……っ！！！！もう容赦しないぞっ、行けっ！ ロジックボムボム皇樹スペシャル！！！！！！」

残った真紅のグリフォンたちへ、ボムというよりは核弾頭ですといった感じの鮫ミサイルが正確に発射される。一撃必殺、次々と撃墜されたグリフォン達が見るまに光の濁流へと飲み込まれていく。

「……………さようなら、僕の初恋……………」

「……………とんでもない悪女だったな……………」

そんな最終兵器があるなら最初っからそれ使ってくれよ……………！！！！

宗彰が心の中で突っ込んだ事は言うまでもない。

第四夜 I・N・T 攻防（後書き）

すみません・・・。

第五夜 I・N・T 窮地（前書き）

うまく力を出せないI・N・Tネットワーク空間に宗彰は戸惑いを
感じるが…

第五夜 I・N・T 窮地

なにはともあれ、ホツと一息ついた二人である。順調にナビシステムに従って右や左に空中を進むうちに、光の渓谷はだんだんと細く入り組み、遥かに切立った虹色の崖が露出する。

「もうすぐ着くはずなんだけど……」

皇樹が呟く。

「皇樹」

不意に、宗彰が口を開く。

「うん？」

「なんでまた私についてこんな危険な任務に付き合ってくれたんだ？」

「な、何を、僕は姉上に無理やりにだな……！！」

「皇樹なら、送り込まれた国境付近で通常空間に引き返そうと思えば引き返せたんだろ？」

「う……まあ。」

「じゃあ何故人一倍臆病で戦いが嫌いな皇樹がこんな白兵戦に？」

不思議だった。確固たる執着のある自分に比べて、皇樹がこんな危険な死地に飛び込むまでの理由はない。

「そ、それは、宗彰が……」

「私が……？」

「う……やっぱなんでもないっ！！　そ、そっちこそ、宗彰は何でこの任務引き受けたんだよ？　逃げようと思えば逃げれただろっ！」

「わ、私は……雷樹星を守りたいから。」

「うえー……？　三日間熟成させたパンツくらい臭いセリフだなあー」

「うっ、うるさいなっ！！ほっとけよ！！！！」

「っはあ、もう。そーしょーはいつも自分が自分がつて根つめちゃつてさあー。YOUがあんまり真剣な目をしてるから僕は引き返すに引き返せなくなっちゃったんだろ……。……おかげでとんでもない初恋のトラウマを抱えることに。」

「皇樹……。……すまない、私のために。」

驚きだった。皇樹がそんな理由で危険な任務をかつてでるなどそうないことだ。宗彰の視界の光が滲み、揺らいだような気がした。

「っだー……。っ違う違う違う!!! だからべつに宗彰のためじゃ無いってば!!! 僕の僕による僕のための行動なの!!! 自分会議でちゃんと可決されてるの!!! それに、謎の新兵器もこの目で拝んで見たいしね!!!!!! だから、そんな潤んだ瞳で僕を見るなつて!!!!!!」

「……。……!!!?」

気のせいではない。確かに視界の端が揺らいでいる。今度はもっと大きく光が揺れ、空間に歪みが生じていく。

「だつ、何だよ急に黙りこくつて!!!! ハッ、まさか宗彰、おいらに惚れたんじゃないかなろうな!!!!? だつ、だめだぞ僕にはそっちの気は……。……ぎにええええええええええええええええええ!!!!!!」

「皇樹!!!!!!」

突如宗彰が皇樹に覆いかぶさる。感極まって禁断の世界に踏み込んだ……。わけではない。すぐ脇を光弾がかすめ飛んでいく。光の揺らぎから大軍勢のグリフォンと兵器群が現れたのだ。ダメだ宗彰僕は女の子のほうがあゝれ、などと意味不明な言葉を吐く皇樹を抱え込むと遙か上空へとジャンプする。直後それまで二人の居た場所は一瞬にして爆炎と劫火の海へと化した。

「囲まれた……。!? くっ、僕としたことが……。……特化障壁展開!!! 迎撃ウィルスソフトウェア発動!!!!。……無効化されただって!?!?!? そんな、どうやって僕のパスワードを!?!」

「この数はマズいな……　くそつ、もう少しだつてのに！！　剣技、雷咲百乱！！」

稲妻の精霊を宿らせ強化した剣撃が吼える。ほとばしる雷撃が敵の何体かを倒す。

「……！？」

宗彰は首を傾げる。さつきもそうだ。本来ならこれくらいの敵、一撃で半数近く一掃できるはずなのに。……I・N・Tネットワークでは物理攻撃が効きにくい！？

すぐに新手が現れ立ちふさがり宗彰たちに火炎放射を放つ。戦況は悪化の一途である。

「どうあ熱あじゃじゃじゃじゃじゃつ！！！！」

炎が皇樹の尻につく。

「うーむ、……調子狂うな。」

「あうーあうーあうー……見えたつ……！！　宗彰、あそこに見える渦巻きが出口だっ！！なんとかあそこまでたどり着ければ……！！！！」

前方二百メートルほどのところ米粒大に、白い光点が渦をなしているのが目を凝らしてなんとか確認できた。

「なかなかぞつとしない距離だな……よし、何とか活路を切り開くから一気に突っ切るぞ！！！！」

「ダミーホログラムとカメレオン光学迷彩障壁展開。数秒なら騙せるはず。」

「行くぞ！！！！　飛龍雷撃！！！！」

宗彰が気合を込めて正面へ剣を突くとその切っ先から稲妻がほとばしり、輝く竜となって慟哭すると行く手を阻む兵器群をぶち抜いて駆け抜ける。

「いまだ！！！！」

刹那開いた活路を一拳に突き進む。焼け付くような熱気に肺が痙攣するがかまっていられない。ウイルスバスター達は迷彩障壁に守られた宗彰達には目もくれず反対側へと逃げるダミーホログラムを追

う。

あと200メートル……150メートル……ウイルスバスター達が
ダミーホログラムを引き裂く……あと100メートル……ダミ
ーに気付いた兵器群が激昂し猛烈なスピードで引き返してくる。
……あと50メートル……30メートル……あと少し……

……20……

……10……

……8……

……5……

……4……

……3……

……

ガンッ！！！！！！！

突如、宗彰の全身が、見えない壁にぶつかった。

「なんてこった宗彰！！ プロテクトウォールだ！！！！」
「なんだって！？」

宗彰は慌てて壁を押すが、堅固な壁はビクともしない。すぐ背後に
はグリフォンが、もう手を伸ばせば爪が掠りそうな距離に迫いつか
んと差し迫っている。

「うわうわうわわ！！！！ 解除パスワード解析……は時間がかか

りすぎるし……破壊ウィルスプログラム……は無効化されてる……！！！！　ぎゃあああ今度こそ死ぬううーっ！！！！」

皇樹が悲鳴をあげ宗彰にすがりつく。くそっ、こんなところでくたばってたまるか……。宗彰は剣のグリップを強く握り締める。彼の深い湖底の瞳に、漆黒の炎が宿る。

「……私の背中にしつかり& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まっている、離すなよ。」

重く静かに皇樹に告げると、神経を集中し渾身の力を込めて剣を打ち下ろした。鮮烈なスパークがプロテクトウォールに炸裂する。見えない壁はしかし鋼鉄のように剛健に立ちふさがり、ほとばしる電撃は逆に彼の身を焦がす。

「無茶だ！！！！　いくら宗彰でも物理攻撃の制約されるこの空間で、プログラムの補助無しにプロテクトウォールを穿つなんて！！！！」
内臓がひっくり返るような衝撃に耐えながら、皇樹は友の背中へと呼びかける。しかし彼はさらに寸分たがわぬ一点へ正確に三連撃を加え、切っ先をねじ込もうとする。

「む、無茶だろうがなんだろうが……守るべき者があるかぎり私は進むしかない、ぐおおおおおおおおおおおあつ！！！！」
宗彰の気持ちに呼応するように青剣が蒼い波動を発し脈打つ。と、刹那、プロテクトウォールにほんの僅かに輝が入る。

「うっ、ウソだろうっ！？」

「いつけえええええええあ！！！！！！！！！！」

ガシヤアアアアン！！！！

氷の鏡を割ったような轟音と共に白く光を放つプロテクトウォールが砕け散り、丁度二人が通れるくらいの穴が開く。瞬間、背後に追いついたグリフォン達の鷲爪が襲い掛かる。しかし紙一重でかわすと白い光の渦へと踊りこむ。一瞬にして世界が静寂の真っ白な闇に包まれ、くるくると吸い込まれていく……………。

第六夜 潜入

黒き闇の底で男は低く声を発する。

「鼠が二匹潜りこんだようだな」

「あら、可愛い……。私が遊んでもいいかしら？」

凜と艶やかな声が答える。

「目狐は鼠を食らうのか？ フン、ならばお前が始末しろ。」

「仰せのままに……ふふ……。」

「よっ、……と」

突然放り出された薄暗い灰色の床へ、宗彰は身を翻し華麗に着地す

る。

どうやら辛くも無事通常空間へと復帰したらしい。

「ぎゅっ！ー！！」

続いて皇樹も前衛的に着地する。頭から。

「ここが……ウトガルド本社………！？」

はじめと薄暗く照らされた室内をキョロキョロと宗彰は見回す。ベッド、管理用パネル、むき出しの便器、鉄格子……この素敵と言いがたい情景から察するにどうやらここは牢獄に出てきてしまったようである。お互いの尾を噛み合って絡み合う二匹の蛇に象られたウロボロスの紋章が、格子の鍵穴部分に刻印されている。

「あの蛇の紋章は……ウトガルドのロゴ……。確かに此处はウトガルドの内部みたいだな。」

「いてて…最終アクセスポイントから察するに、かなり本社コロニー内部のほうまで入り込めてるはずんだけど……それにしても侵入したとたんに牢屋の中なんて……僕らつてぞつとするほど運がイイね……うへえ、トイレ流してない……。」「確かに、侵入するやいきなり籠の鳥とは間抜けもいいところだな……宗彰は自嘲気味にため息をつく。まあいいや。たとえ敵の本拠地といえど、あの忌まわしきI・N・Tネットワークよりはマシだ。なんせ地に足をつくことができるのだから……」。

それにしても……鼻がもげそうな独房特有の臭気に宗彰は端正な顔を歪ませる。快適な気分とはとてもいえない。

「行こう。こんな処にいたら病気になる。……破っ！ー！！」

青剣の切っ先を鞘走りさせて勢いづけると壁に大きく円を描く。と、残光そのままポツカリ格子が割り貫かれる。

「……ひゅ。お見事。」

おそろおそろ、暗い通路へと歩を進める。鋼鉄の壁が続く閑散とした通路に人の気配はない。見張りもいないなんて……。

「こ、こここ怖いよう……。そ、宗彰っ、僕は武技も魔力もか
らつきしんだからなっ、しっかり守ってくれよう……。！」
「ひつつくなよ……」

皇樹がひしと背中にしがみついて来るので大変歩きにくい。

迷宮のように入り組んだ通路を見わたす。見張りなど無くても、
道しるべ無き迷い人はこの蛇の腹の中でゆっくりと消化され、決して生きて返れぬのではないだろうか。

ここまで来れるものは、外部侵入者はおろか、ウトガルドの社員
にも限られた者たちだけなのだろう。牢にも囚人の姿はない。

……いや、

一人だけ、独房の床に金髪の女が寝こけている。そのガサツな寝相
さえなければ、なかなかの美人だ。しかし……。

うぐ……。こんな不潔な所でよく眠れるなあ。よっぽど図太い神経
の持ち主らしい。

「うつひよ……。っ、グラマーなネエちゃんのM字開脚……。！！
！ 僕鼻血出そう……。」

皇樹が背後から飛び出ると、鼻の下を五メートルくらい伸ばして少
女のもとへとダッシュする。恐怖心はスケベ心に勝てなかったらし
い。……ある意味凄い。

「デメエツ……！ 俺様の体に指一本触れるんじゃねえよ……！！」
皇樹が少女の肢体を覗き込んだ瞬間、ガバリと少女が身をはね起こ
す。

「んぎゃあっ、ごめんなさいごめんなさい……！！」

「んふ……。……なあんだ、アサリの詰め合わせかよ……。……むに
やむにや……。」

どさりと女が倒れるとまたいびきをかいて爆睡しだす。ただ寝ぼけていただけらしい。どこまでも神経の図太いやつ。一体なんでこんなところにいるんだろう……。ちよつとだけ宗彰は不思議に思う。

「ね、寝言……！？」

「………………。行こう…………」

敵の中枢だ……。些細なことを気にしていたらキリが無い。

「ぐおっ！！！」

「がはっ！！！」

「あーれー助けてモモたんー！！！」

兵士二人、不幸にも居合わせてしまった研究者風の男一人が景気よく吹っ飛んでいく。

重鋼な扉のトラップを解き、ところどころで出つくわす見回りの兵士や研究員を首尾よくぶっ飛ばしながら2人は順調に奥へ奥へと進んでいく。I・N・Tネットワークでの物理制約から解き放たれ、絶好調の宗彰の武技が炸裂していく。

レベルアップ音まで聞こえてきそうである。

「一応三対二で不利なんだからお前も加勢してくれよ…………」

「無理！！ 無理無理無理無理！！ なに言ってるのYOU全然苦戦して無いじゃん！！ 化け物並みの強さしてからに！！！！！」

だからといって戦闘の度に足やら背中やら頭にしがみついてこないでほしい……。確かにしっかりと掴まってるとは言ったけどさ。心の中でこっそり宗彰は呟く。

とはいえ皇樹もお荷物というわけではない。戦闘でこそミミズのよ

うに這いつくばって震えているが、例の光のキーボードでウトガルド情報バンクへハックし、ドアロックの解除にマッピングにと活躍している。彼の助けが無ければこうもスムーズに進むことは出来なかっただろう。それに、頼られるのもまんざら嫌ではない。

「宗彰の背中つてがっしりしてて頼りになるなあ……僕、なんだか宗彰に惚れちゃいそう……。」

「駄目————っ！！！！！！！！それは駄目！！！！！！！！！！」

そこはしつかり否定しておこう。光の速さで皇樹の腕を振り解くとずんずん進む。

「ま、待ってよ宗彰、冗談だよっ！！！！今は冗談って事にしておくから！！！！」

慌てて皇樹が追いつがる。なんだか“今は”という言葉が異様に気になったが、しぶしぶ着物の袖をつまむのだけは許可した。

さらにいくつかのロックを解き、皇樹でも解析できない扉は宗彰がぶち破って進んでいくと、薄暗く鋼鉄製の回廊から、白く清潔に保たれた通路へと景色が変化する。

宗彰達がいまさしかかっているのはどうやら何かの研究施設エリアのA棟という処らしい。いくつか通り過ぎた白いライトに照らされた無機質な小部屋には、そこかしこに見慣れぬ装置が並ぶ。巨大な脳幹の形をした電腦コンピューターやら、縦横無尽に絡み合ったパイプ、機械と融合した魚人の泳ぐ水槽、もうなにがなんやらわからない巨大装置などがずらり並んでいた。

人影もグンと増えた。しかしそのほとんどが兵士ではなく研究者である。

大概の研究者達は宗彰や皇樹といった外部者への警戒心……：というか興味がならしく、果敢にも皇樹が道を尋ねてみたところ親切にもトイレの場所から社員食堂お勧めメニューまで教えてくれさえた。なんでも、本社へ転勤してきた人は必ず一度は迷子になるらしく、彼はそういった迷い人を教え導くのが生きがいらしい。

「相転移発生制御装置……？ この研究棟全体がそうだけど。え、メインシステム？？ …… ああ、R、UR：1型のことが！ あそここの中央エレベーターを使えば一気にいけるよ。でも、最下層セントラル・ゲブラーエリアへは確かSSS上級研究者の認証とパスワードがないと入れないはずだけど……。」

「大丈夫！！！ 持ってますから！！！」

皇樹が胸を張ってSSS上級開発者のカードを掲げる。先ほど牢獄付近でぶつ飛ばした研究者の懐から失敬したものである。

「ええっ！！！ 君ら若いのにずいぶん優秀なんだなあ……。それとも、もしかしてクレアさんの若いツバメだったりして！？！？！？ ……ん？ そういえば君、なんだか雷樹星の天才科学者オウキに似ているような……んんんん？」

「やつ、気のせいっ、怒涛のように気のせいっすよー！！！ いやっ、いやいやいやどうも御親切にありがとうございまシタ！！！！ 今度社員食堂に行った時はウトガル丼をぜひ食べてみます！！！！」

！
「研究者がなおも首を傾げるなか、逃げるようにエレベーターへ飛び込む。」

「ああああああ危なかった……！！！！」

「おまえって天才科学者だったんだな……。」

ゆっくりと、エレベーターが動き出す。

ヒュゴコオン……………。

ガラス張りのエレベーターがチューブ状の柱の中を、最奥部めがけて下降してゆく。エレベーターは巨大な円形の吹き抜けの淵にくっつくような形で設置されており、宗彰は巨大な闇の深淵へと落下

してゆくような錯覚を覚える……。めざす最奥部は遙か闇の底のほう。

急速な降下にキン、と微かに耳の痛みを感じた。

……。コロン…。

第七夜 遭遇

「ふわあああああつ……んーっ、よく寝たぜ……ういっつと。」

マサムネ・キーク、

通称マサは仄暗い独房のなかで大きく伸びをした。なんだか百億のアサリにジロジロ眺められる不思議な夢を見た。

褐色の肌、赤のタンクトップ一枚にデニムの短パンといった軽装では豊満な肉体を包みきれないほどに危うい、ボンキュッボンのナイスバディ。波打つ金髪をぐいっつと頭のでっぺんで縛った、なかなかの肉体派美少女である。

「おっと、俺様ったらこんなセクシーな格好で寝ちまつてたのか！こりやうつかり蛇の男共、五百人くらいは愛の虜にしちまつたかしんねえな！！」 うーん、俺って罪な女……。」

実際は皇樹を恐怖の虜にしたのだが、彼女は知るすべもない。

死体のゴロゴロ転がるこの前の牢に比べたら、今回はなかなか快適な寝床だった。が、そうゆっくりもしてられない。なにせ俺は流浪の盗賊なのだ……。

三ヶ月前、ウトガルドの侵略に無秩序化した銀河警察を脱サラし、先だつてめでたくA級指名手配犯にランクアップしたのだが、そこでちつと調子に乗ってしまった。ウトガルドの新兵器情報を盗んでやろつと華麗に侵入できたのはいいが、うつかりミスってこの様である。

「ううーっ……あんなところに幻の名酒なんか置いてあるから悪いんでえい……。さて、酒も抜けたことだしな……うりやつ！！」

ぶつぶつと一人言つと、鉄格子を両手でつかむ。まるで針金のようにグニヤリとねじ曲げるといとも簡単に脱出完了。

「フッ、ちょーろいもんよ……うへっ、なんじゃこら。」

スッパリと円型に切断された牢をみて、マサは一瞬ポカンとする。

とその時、

ドオオン……ッ……!!

突如、地震に似た激しい大地の揺らぎが走り、彼女は腹にボディーパーを叩き込まれたような衝撃を受けよろめく。

「な、何だ!？」

マサは五感覚を研ぎ澄ます。

微かに、硝煙の香りが彼女の鼻腔をくすぐる。野獣の勘が激しく警鐘をならし、身体が闘志に滾るのを感じる。

「なんだなんだあ火事かあ? ま、逃げるにはうってつけのチャンスだな!……!」

彼女は獅子の瞳に似た瞳をギラリと光らせると、さつと身を翻し、黄金の髪を煌かせて闇の回廊へと消えていった……。

「ここが、ウトガルド最奥部………?」

大空洞を思わせる高い天井、白光に満たされた環状のドーム。壁に大きくウロボロスの紋章が掲げられている。

宗彰の体を、ピリリと緊張が満ちる。エレベーターから降りる時、厳重な警戒が敷かれているだろうと身構えたが、意外なことに兵士はおろか、研究者の影さえ無い。無機質な機器の稼動音だけが響く不気味な静けさが二人を迎えた。

中央の巨大円柱を中心にして制御端末コンピューターが波紋状に

並んでいる。自動制御になっているのか、所々に解読不明の文字の羅列をたれ流しにした光のウィンドウが浮かぶ。

「あ……それは……!?!?」

宗彰の目が、吸い寄せられるようにその巨大円柱へと注がれる。半径三メートルはあろうかという円柱が、巨大な樹木のように根を張っていた。すべての制御機器はその円柱をぐるりと取り囲むように設置されていた。まるで守るかのように……。

「どうやら、相転移統御装置のメインエンジン、敵さんの心臓ってわけだね……。」

皇樹が幾分強張った声で呟く。

「そうか、あれが……。」

宗彰は、ゆっくりとその円柱へと歩を進める。恐れと緊張の入り混じった興奮に喉の奥がジンと疼く。と同時に、やっとたどりたどり着いた獲物に宝物を見つけたときのような喜びに胸が打ち震える……。そう、これを破壊すれば……。星は救われ、すべては終わる……。彼の高まりに呼応するように、鞘の剣が青い光を纏う。

しかし、中央へと近づき、その巨大円柱と対峙すると彼は絶句した。「こ、これは……っ!?!?!?」

聳え立つ太く、巨大な柱。遠目にはわからなかったが、その中に小さな生体維持プラントがはめ込まれている。水族館の水槽を思わせる、美しい水色の溶解液に満たされたリアクター内の“もの”を見て、宗彰の全身にぞっと震撼が走った。

銀髪の少女がその身を漂わせている……。しかし意識は無く、その瞳は堅く閉じられている。否、死んでいるのかもしれない……。

「そんな……これは、これは一体……?」

……。それにしても、なんて……。宗彰はその少女にじっと魅入る。なんて、美しいひとなのだろう……。宗彰はその少女にじっと魅入る。

白銀の髪、すらりとした肢体。

淡雪のように白い肌。

天使のようなあどけない顔……。

まるで宇宙の美の粋を集めたような、見るもの総てを魅了する完璧な美しさ……。すつと、宗彰の青い瞳が遠のく。

……そうだ……

私は、知っている……君を、

ずつと、ずつと前から……

そう……君の名は……

「ルリ……」

「えっ!？」

皇樹が、ぽつりと漏らした呟きに思わず宗彰は聞き返すと、皇樹はちよつとおどけたようにリアクター下のプレートを指差した。

「ほら、このR UR:1っていうの、この娘の名前なのかなあと
思つてさ。」

『1』を『I』って読み替えるとR URI、丁度ルリって読める
から……え、ちよつと無理ある?」

「ルリ……瑠璃……。」

少女を見上げ、宗彰はその言葉を反芻する。その響きは何故かとても懐かしく甘い響きだった。……忘れてしまった、何か……遠い、
約束。

「うーん、しかし一体なんでこんな超カワイコちゃんがこんなところでホルマリン漬けになつてるんだらう?」

皇樹が首を傾げる。宗彰の記憶に、先ほどの研究者の言葉がリプレイされる。――相転移発生統御装置メインシステム? ああ、R―
UR:1のことか――

この少女が……メインシステム……? 私が破壊すべき”敵の新兵

器”は、このいたいけな少女だということのか……？

「そう、相転移発生統御装置R―UR：1型。それはその娘の膨大なエネルギーの上澄みを掬い取るデバイスに過ぎないわ……」
突如、凜と艶やかな声が響く。

振り向くとそこには一人の女が立っていた。

第八夜 夢の底から

「うふふ、いらっしやい。？オーパーツ”の坊や達……………」

真っ赤な唇、肩にかかるほどのクセの強い漆黒の髪、胸元にウロボロスの紋章をあしらった白衣をすらりと着こなし、そして何よりも大人びた黒の瞳が印象的な美女である。

「あ、あなたは…………っ!？」

「あたくし？ 私はクレア。クレア・バルタザール。」

クレアはにつこりと微笑む。

「クレア？ その名前は聞いたことがあるよっ!! ウトガルド随一にして稀代の天才科学者。いや、それにしてもこんなお美しい方だったなんて!!！」

「まあ、ありがとう。でも私のちっぽけな頭脳なんて、雷樹の百合香姫…………それに、皇樹様には遠く及びませんわ…………。」

クレアは微笑み、赤く長い爪を伸ばした指先で皇樹の頬に触ようとする。と、瞬間、宗彰が皇樹を乱暴に引き寄せ警告を発する。

「気をつける皇樹！！ 私たちの正体がばれている……！！」

「あら、お嬢ちゃんから何も聞いていないの……？ 私が、ウトガルドの内通者、相轉移システムの情報提供者よ……」

「あなたが……！？ 姉上の言っていた情報提供者さん！？ どうしてウトガルド役員幹部の貴方が協力を……？」

「あら、女の秘密を詮索するなんて野暮なのね。いろいろあるのよ女心は。」

につこり。

薔薇がほころぶ様な甘やかな笑顔が咲く。その笑顔につられて思わず宗彰の肩の緊張が少しほぐれる。

「クレアさん、コレは一体どういうことです、R―UR：1が……あの昨夜の凄まじい空襲が、その娘の力の上澄みに過ぎない……？ その娘は何者なのです？」

「この娘は……銀河のオーパーツの一つよ。至高の宝玉。そして愛しい我が娘……。」

クレアがリアクターへと歩み寄り、愛おしそうにその表面をなでる。

「オーパーツ……？」

オーパーツ、その言葉は宗彰も聞いたことがある。

「そう、オーパーツ。この銀河に散らばる、物理的にその存在を説明できない巨大エネルギーが具象化したもの。人智を越えた神の力

……。それは、様々な物質に顕現し……人の姿を形作ることもあるわ。貴方たちのようにね。」

そう、宗彰達……雷樹王家の血を継ぐ者は“星の力”と呼ばれる特殊能力を代々受け継ぐ。鉄壁の障壁。百合香、皇樹の人知を超えた頭脳、宗彰の力……そして、その力があつたからこそ強大なウトガルドの侵略に抗うことができた。王家の血脈……それも、銀河のオーパーツという巨大エネルギーの一形態である。

「この子はその中でも桁違いの力を秘めているわ。そう、オーパーツなのかも疑わしい。総てが謎に満ちた、時空が歪むほどの力が凝縮された至高の存在。……でも、私たちはその巨大なエネルギーを引き出すことが出来ない。ただこの子という器から溢れ出たエネルギーを掬い取り相転移発生装置へと転用するしかない……足りない、足りないのよ、それじゃあ。だから……わかるでしょう??？」

クレアの顔が歪み笑う。美しく、しかしさっきまでとは打って変わって冷たく歪んだ笑顔。

「まだわからないの？　くすつ……間抜けなネズミさん達……。」

クレアがパチンと指を鳴らす。と瞬く間に大量の銃を構えた兵士達が現れぐると二人を包囲する。胸元にウロボロスの紋章。

「な……っ!？」

「不思議に思わなかったの……？　どうして、大した苦もなくウトガルド深奥まで入り込めたのか……？　貴方たちはおびき寄せられた鼠なのよ。我が社がもう二つのオーパーツを入手するためにね。」

「なんだって!？」

宗彰が聞き返す。

「うふふ、いいわね、その表情……ボウヤ、私の好みよ……それに、絶対破壊不可能にプログラムされたプロテクトウォールをも破壊するあの力もとっても魅力的……実力試験も合格よ。ふふ、もう一つ相転移統御装置がつくれるわ……。」

クレアが顎に指を当て、値踏みするように目を細める。

「ぼ、ぼぼぼぼ僕たちをモルモットにするっていうのか!？」

皇樹が蒼白な顔で叫ぶ。

「名誉ある科学への貢献っていつてほしいわね。」

宗彰を囲む兵士の輪が縮まる。

「殺しちゃダメよ! 腕くらいなら取れてもいいわ。」

クレアが兵士に命令する。腕くらいって……。

「ま、まずまずまずいぞ宗彰……ど、どこか、か、隠れる場所……!……! 包囲されているんじゃ宗彰の背中に隠れても後ろからパキユーンされちゃう!! そ、そうだ床に穴を掘って隠れれば……っ」

皇樹が床に這い蹲って猛然とコンクリートの床を引っかき始める。人間ここまでくると情けないとか見苦しいを通り越して芸術の域である。

「くっ……!!」

宗彰は青剣を抜き稲妻をほとばしらせ、踊るように向かい来る兵士をなぎ払う。彼の瞳が燃え、湖底の瞳が揺れる。

「うふふ、勝ち目が無いのに向かってくるなんて勇敢ね。見苦しくて素敵よ。」

宗彰の頭の中で声がする。

許せない……。

“あのひと”を、ただ力のためだけに利用するなんて……!!!!

ガキッ!!!

怒りに任せて少女の眠る水槽へと剣を突き立てる。が、水槽にはヒビひとつ入らず、宗彰の体はすぐに襲いくる兵士達へと飲み込まれる。

「うふふ、頑張るのね。でも無駄よ、このリアクターは強大なエネルギーを封じ込めるための技術の粋を集めた障壁。絶対に壊れないわ。」

体中の血がまるで沸騰したかのように熱くたぎる。怒りなのか、戦いへの喜びなのか、脳内麻薬が大量分泌され、恍惚にも似た興奮の感覚に頭が真っ白になり、右も左もわからず目の前の敵を切り伏せる。

“あのひと”を救い出さなければ。

もう、もう、
“あの頃”のちっぽけな自分じゃない。
もう、なにも出来ないのはいのち！！！！！！

リン

刹那、一面緑の草原が広がっては消える。

リン

刹那、青い炎が燃える。

意識が真っ白に染まっていく……

「皇樹、宗彰くん、聞こえるっ！？」　今から雷樹への転移ゲートを開くわ！！！」

突如、百合香の声が響くと共に、大広間内のウィンドウが次々に百合香のドアップ映像へと変貌する。

[illegible]

宗彰がバーサーカーと化し、飛び交う銃弾の中ミミズのように這いつくばって耐え忍んでいた皇樹が涙と鼻水でぐっちやぐちやの泣き顔でウィンドウに飛びつく。

「よしよし、頑張ったわね……。皇樹、宗彰くん！　ここはいったん退きなさい！！　……。宗彰くん！？」

理性を失った心に、撤退の言葉が木霊する。

退く……。？　嫌だ！　まだあのひとを救い出せていない。

「そつ、そうしょおつ、止めるんだつ、」

「宗彰くん、退きなさい！！！！　今は任務よりも自分の命を優先なさい！！！！」

ギユウウウウウウ……………

幾重もの光の輪が宗彰の体を包み、いやおう無く光の渦の中へと飲み込まれていく……。

「嫌だあああああああ————つ！！！！！！！！」

パシユンツ！！！！！！

まばゆい光が一閃した後、宗彰と皇樹2人の姿は跡形も無く消えた。

「あら、やられたわね……」

クレアが歌うように呟く。さほど悔しそうでも無い。

「残念ね。“あの場所”に近いオーパーツと接触させればあるいは、思っただのに……」

リアクターを背にもたれかかり、ぶつぶつと何事かを呟く。

「う……あ……っ」

彼女の思考を遮って、兵士が小さく悲鳴を発した。

「なあに？ 煩いわね……」

蠅でも払うように兵士を見やると、蒼白な兵士の指差すまま後ろのリアクターを振りかえった。

漆黒の瞳が驚愕に見開かれる。

淡い水槽に浮かんだ、ぎょろりと青白い瞳が二つ、じっと彼女を見下ろしていた………………。。

第九夜 炎上

「そんな……精神拘束から自力で目覚めたというの……!？」

クレアは驚く。

「……免疫!? ……いえ、常人の五百倍もの投薬量なのよ、ありえないわ……」

クレアは少女を見る。しかしその言葉とは裏腹に、瞳は輝いている。

リアクターの少女はおぼろげな瞳でクレアの瞳を見つめ返し、クレアへと手を伸ばす、が、当然その手は水槽の透壁にあたって止まった。一瞬戸惑い手を引っ込めるが、ふたたび出口を探すかのようにリアクターに手をあてがう。

「クレア様……っ!!!!!!」

兵士が声をあげる。

「大丈夫よ、破壊できるはずがないわ……。」

クレアが答えた。

目の前の邪魔な壁がびくともしないことを悟ると、瞬間少女の翳した手のひらに光の粒が収束していく。

「……………まずい!!!」

クレアが飛び退ると同時に鉄壁のリアクターが粉々に砕け散る。エメラルド色の溶解液が流れ出るなか、いとも簡単にリアクターを吹き飛ばした少女は、自分がした事に驚いたように掌を見つめる。

「何をしているの？ 早く拘束するのよ。そつと、警戒させないよ
うによ……そうね、そのあなた。行きなさい。」

有無を言わせぬ口調でクレアが兵士の一人を指差す。指名された兵士がためらいながらも少女へと歩み寄り、震える手を差し伸ばす。

「だ、大丈夫、なにもしないよ……こつちへおいで……！！」

少女が、天使のように愛らしい瞳で兵士を見つめ、ゆっくりと兵士の手を握る。

「……そつ、いい子だね……うわっ」

突然、少女が兵士の腕を引き抱き寄せる。兵士がよろけ少女に覆いかぶさるやいなや光の閃光が走った。兵士が膨れ上がったかと思つと破裂し、一面に赤いペンキをぶちまけた様に血が飛び散る。

「乱暴な子ね……撃ちなさい。」

クレアが兵士達に命じる。

兵士達が一斉に銃を乱射する。激しい銃弾の雨嵐が貫き、たちどころに一糸纏わぬ少女の肢体にいくつもの痛々しい赤穴があく。

「うああ………つっつっつっつ！！！」

少女の顔が苦痛に歪む。

が、傷口が隆起したかと思つと塞がり、たちどころに滑らかな肌へと戻る。

「自己再生能力っ！？ 素晴らしいわ！」

クレアが歓喜の声を発する。銃弾の雨は、まどろみを邪魔された少女の逆鱗に触れるには充分すぎるほどだった。

閃光。

辺りが一瞬にして灼熱の煉獄へと姿を変え、兵士達が一瞬にして赤黒い壁の染みとなる。

「アハツ……！！ 素晴らしい！！ 素晴らしいわ！！！！ これがあなたの真の力のなのね！！！！」

ただ一人、繰り広げられる惨劇を離れて觀賞していたクレアが、狂喜の声を上げて少女に駆け寄る。少女は感情の無い眼で彼女を一瞥すると手に光を収束させていく。

しかし、突然、不可視の力に全身を痙攣させると力なく膝をついた。「…… ふふ、いけない子ね。私は殺せないわ……。そういう風に作ったもの……。これで総ては私の思うとおり。さあ、ママと一緒に行きましょう……。」

「……………っ。」

少女が噛み付くようにクレアを睨みつける。それに構わずクレアの指先が、そっと少女の白銀の髪を愛しげに撫であげる。

パンツ……！！

少女はその手を乱暴に払いのけると床を蹴って跳躍する。そのまま遙か高く舞い上がると、天井を貫き姿を消した。

残されたクレアは薄く微笑み唇を舐める。

「そう、まだ遊び足りないの……。うふふ、必ず捕まえてあげる……。」

『特別非常警報発令、セントラルゲブラーエリアにて高エネルギー被験体が脱走。戦闘員は直ちに急行、非戦闘員は直ちに避難してください。特別非常事態発生……』

耳障りなアラートが鳴り響き、あたり一面真っ赤なランプに染まっている。

少女は朱に染まった回廊を跳躍し、降り注ぐレーザーガンを紙一重でかわしていく。

先ほどから殺しても殺しても蟻の様に湧いて出てくる奴らが邪魔だ。

少女の前に後ろに兵士が立ちふさがり、銃火の雨嵐を打ち込む。

少女の足が壁を蹴る。次の瞬間、彼女は数十メートル離れた距離の兵士達の首を跳ね飛ばしていた。

ビシャ……ッ！

嫌な音をたてて鮮血が少女の素肌に降り注ぐ。その凄惨な光景はしかし何故か、一層彼女を美しく凄絶に際立たせさえあった。

「ひっ……ば、化け物めえっ……！」

何百何千という銃弾がしつこく彼女にまとわりつく。

「あうっ……」幾つかの白い光線が彼女のすりとした肢を貫き、鋭い痛みが走る。よろめきながらも、その体から反射的に光撃波が連射される。

衝撃波と凄まじい光があたりを呑み込みホワイトアウトする。

爆炎と共に鋼鉄の壁が捻じ曲がり吹き飛び、兵士達のちぎれた手足が宙を舞う。

爆炎と粉塵の中から少女の姿が現れると、そのまま空洞の吹き抜けを矢のようにぐんぐん上昇する。

やがて、ぴたりと空中に停止すると灼熱の煉獄と化した穴底を見下

るす。火の粉交じりの熱風が彼女の白銀の髪をたなびかせ、まるで夕日に煌く水面の様にキラキラと美しく輝く。凍てついた蒼い瞳に紅の炎が燃え、無慈悲に翳したその手に光が収束していく。

ドオオンッ……

放たれた巨大なビルほどの光の雷撃が壁を貫き、宇宙空間へと突き抜けていく。

ドオオンッ……

ドオオンッ……

手当たり次第に第二波第三波が放たれる。

次々と外壁に巨大な穴が穿たれ、誘爆が巻き起こりあたりは地獄と化す。

自身を支えきれなくなった支柱が崩壊をはじめ、巨大なコロニーが地盤から崩れ行く。

「はっ、はっ、は………っ」

流石に少女の底なしの火力にも翳りが差し始めたのか、表情に疲れの色が浮かんだ。

第十夜 悪い奴ほどよく眠る？

『ゲブラーエリア大破、研究エリア大破。セフィロトエリア火災発生。宇宙外壁殻大破。酸素濃度急速に低下。被害拡大。……生命維持機関に被弾。重力異常増大。減圧防御隔壁作動……効果ありません。十分後に当コロニーは崩壊します。速やかにシャトルにて重力圏外へ離脱してください……』

耳を疑うような被害報告が矢継ぎ早に彼女の耳に飛び込んでくる。

「……こりゃーさっさとずらからねえとクソヤベえな……」

金色の瞳がキラツと光る。ついつい目ぼしい物を物色していて思ったより時間を食ってしまった。

気がつけば唯でさえ入り組んだ回廊に分厚い障壁が降りて、まるで迷路である。

とんでもない事が起こっているらしい。先ほどの震動を皮切りに、次々に激しい衝撃が下から響いてくる。極めつけはさっきの光の柱だ。敵襲か、はたまた事故か……？

「ったく、何も俺様が居るときにゴタゴタしてくれなくってもいいだろ……！」

さっき見た電光情報板によると、ここからまっすぐ直進すれば小型ドッグがあるはずである。が、今マサの前には分厚い防御隔壁が通せんぼしている。遠回りをしている暇はない。

「ちっ、しゃらくせえっ……！」

ゲンコツで思いっきり殴りつける。信じられないことに厚さ数十セ

ンチはあろうかという障壁に大穴が開く。

「はっはっはっ、はあ……………痛あ……………」

流石に無理があつたらしく涙目で真つ赤に腫れあがつた拳をふうふうと吹く。気を取り直して顔をあげたマサは絶句した。

破壊した障壁扉の先に、二メートル感覚で点々と障壁扉が続いていたのだ。

「……………そりゃないぜセニョリー……………」

こりゃもう辞世の句でも詠んだほうがいいかもね？ そんな考えがちらりとマサの頭をよぎったとき……………。

ドオオン！！！！！

突如凄まじい轟音と共に、血まみれの少女が弾丸のように床を貫いて現れ倒れこむ。

「なっ、なななな！？」

「いたぞっ！ 撃て！！」

目が飛び出さんばかりに驚くマサを尻目に、次々と駆けつけた兵士の一団が銃弾の豪雨を少女に浴びせかける。ふらつく少女の身体がいびつに痙攣し、みるみる蜂の巣となる。相手は丸腰……………それどころか丸裸の少女である。

「な、なんて事をしやがる……………っ！！」

思わずマサは瀕死の少女に駆け寄り抱き寄せる。こんな年端も行かぬ少女をよってたかつて惨殺とは、ウトガルドの奴らはみんなキチガイになっちまったのか？

「どけっ女！ そいつは……………！！」

兵士が悲鳴にも似た怒号を発する。だがその言葉の終わらぬうちに、腕中の少女がピクンと震えたかと思うと手を翳す。一瞬の凄まじい閃光。兵士達が悲鳴すら残さずに灰となる。

「う…そだろ…………？」

カラ カラン カン

奇妙な音に見やれば少女の傷口が次々と銃弾を吐き出していく。あれほどの傷がみるまに完治し、血にまみれた姿もよく見れば総て返り血である。

「……………冗談きついでせニヨリ……………」

呆然と少女を抱きしめたまま立ち尽くす。
が、すぐに、まだこんなに残っていたのかと驚くほどの兵士の軍勢が押しよせ二人を包囲する。

「そいつ」をこっちへ渡せ！！」

兵士が声を荒げる。一瞬迷ったがマサはすぐに結論をはじき出した。このイタイケな少女がとんでもない化け物で、兵士達が血眼で銃撃を打ち込むのは心の底から納得がいった。

何より自分は急いでいる。この非常時に面倒ごとはゴメンだ…………。

（じゃあな、悪く思うなよ……）

不意に少女が顔を上げる。間も眩むほどの美しさ。あ、と思うまもなく少女の大きな瞳がマサの視界に飛び込んでくる。

その瞬間、マサは果ての無い銀河へ放り出されたような気がした。長い睫の奥から、夜空に金粉をばら撒いたような青い瞳が震え、彼女の脳に直接訴えかけてくる。

助けて……

頭が真っ白になっていく。倫理の秩序がひっくり返り、抗いようの無い力が彼女の心を支配していく。気を失いそうな美しい瞳。見るもの総てを虜にして離さない……。

気がつけば、マサの拳は兵士をブツ飛ばしていた。ぐったりとした兵士を引つつかむと、恐るべき馬鹿力で次々と障壁扉を破壊しながら駆け去っていく。

「なっ、何をする……!!」

背後から集中砲火が浴びせかけられる。

どうしたんだ俺!?

何やってんの俺!?

きゅつと、少女がマサの腕を握る。すうつと嘘のように迷いが消えていく。そうだ、俺は……俺は……!

「うるせえ! 俺は……、俺は可愛い女の子の見方だ――

――っ!」

泣き声にも似た絶叫が崩れゆくコロニーに木霊した。

総てが漆黒の闇に吞まれていく。

もうじきここも崩壊する。比類なき権勢を誇ったウトガルドの総てが崩れていく……。

「クレア！！ これは一体どういうことだ！！！」

ウトガルドは女に掴み掛かる。

「申し訳ありません……不足の事態がおきまして……。」

「ふざけるなっ！！ R—UR：1の拘束をわざと解いたのは貴様だろう……貴様しか出来ないはずだ！！！」

「あら、お戯れを………」

ゴッソ

否定する言葉とは裏腹にクレアは男に銃口を突きつけて微笑む。

「だって、あんなに美しい宝石は最高のパーティーでお披露目しなきゃ、勿体ないじゃない………」

星ひとつもあるかというコロニーが崩壊していく。巨大な権勢を

誇った欲望のすべてが星海に呑み込まれていく……マサの瞳に、ついさっきまで自分の居た場所が映る。

「信じらんねえ……あの蛇の本陣がこんなわずかな時間で……明日の宇スポの見出しは決まったな……」

「……………」

マサは窓にへばりつくようにして、歴史のページになるであろう光景を見物する。自分は安全圏にいるのをいい事に野次馬根性まるだしである。

「まっ、きゃつらもずいぶんと悪でえ事やってたからな。因果応報って奴だぜ!!」

「……………」

彼女は今、ドッグにあった小型宇宙艇を頂戴して航行している。あの少女も連れて。少女はあれほどの大破壊を引き起こしたのが嘘のように、毛布に包まって淡く息づいている。

「なあ、おめえ、よかったら俺と盗賊やんねえか？ なっ!! 俺とおめーならあつという間に大金持ちになれるぜ……!! うしし……」

「……………」

……………。

少女は、マサの言葉にも眉ひとつ動かさず、じっと銀河のような瞳で虚空を眺めている。痺れを切らしたマサが少女への顔を覗き込

む。

「なあ。お前さんよー、だんまり決め込むのもいいけどよー、この命の恩人様に名前くらい教えてくれたってバチは当たらないと思うぜ？」

「な、ま……え……？」

少女が小さく呟き、不思議そうにマサを見やる。

「そ、名前。あんたの名前。ああ俺はマサ。アンタは？」

「なまえ……わたしの………」

すつ、と少女の青い瞳に光がともる。輝く砂塵をちりばめたような銀河の瞳が、遠くを見つめる。遠く、ぼやけた夢の中で聞いた声が頭に響く……

「る、り………瑠璃。」

ぽつりと呟いたきり、少女は深い深い眠りへと堕ちていく。それから、マサが何を聞いても目を覚ますことは無かった……やがて、彼女のやわらかい唇に、そつとマサの唇が押し当てられた事にも気付かなかった。

果てしなく続く星の海に、ちらちらと小さな星屑たちが頼りなく瞬いていた。

第十夜 悪い奴ほどよく眠る？（後書き）

イヤッファー！終わった〜い！

いや、終わってないけど、全然終わってないけど…っ。

とりあえず、以前に書いた分は全部アップしました。書いた事、すっかり忘れてました。読み返しました。精神的にキマした。

いやもう、クツソ長い話なのに、こんな所まで読んで下さって…（る人いるのかしら？）、なんて暇人…ゲフン、本当に有り難うございます！！愛してます！！居たら！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2508b/>

今日から君も

2010年10月11日21時44分発行